IMAJ ニューズ

NO.28

国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　昭和57年4月20日
発行所　国際MRA日本協会
発行者　柳沢錬造
（非売品）　TEL.03－821－3737(代)

INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN　〒113・東京都文京区千駄木4－13－4

Dialogue on Development II

The Middle-East Asia and the World meet for a conference of understanding

■パンチガーニ会議レポート　2P

■アイスランドへの旅　マリー・クロード・ボーレル　9P

■あの時この人　その1 インドへ渡る　11P

■クレイグご夫妻4月来日　日本MRAに新たな力　13P

■日本に眠る弟を訪ねて　エルシー・キャンベルさん来日　14P

開発のための対話 パンチガーニ会議レポート

昨年の暮れから新年にかけて、インドのMRAセンター「アジアプラトー」で二つの国際会議が開かれた。一つは12月28日から1月2日にかけて開かれた「アジア・太平洋青年会議」である。百人以上の青年男女が、アジア、太平洋諸国、そして欧米からも参加した。会議には、スイスの青年の指導による朝6時30分からの体操を初めとし、全体会議、グループディスカッションは勿論のこと、スポーツやコーラス練習、農場での労働、皿洗いなどの共同作業等々が盛り込まれた。それぞれの国の若者がどのような問題に直面しているのかを理解しようと努め、その問題解決のための自分達の役割が何かが話し合われた。「核戦争だけでなく全ての戦争に反対して欲しい」というイランの学生の言葉も胸を打った。より良い社会を築くためには先づ自分から変わらねばとカンニングや無賃乗車を止める。又、身の回りで起こる小さな不正を正す勇気を持つ、などの決心が会議の終了する頃には参加者の多くから述べられた。会議を通して培われた国境を超えた友情は貴重なものとなろう。日本からの参加者を代表して、狩野、深澤両君に感想を述べてもらった。

さて、引き続き、1月3日から9日にかけては「開発のための会議－II」が開催された。これは経済的・技術的開発を正しく機能させる基盤ともなる人間の開発、心の開発をいかになすべきかに主な焦点をあてたもので、中東の代表を初め世界各国から2百人余りが参加した。汚職や人々の不和、その他諸々の開発を阻む問題にどのように対処したか、又すべきかが体験を交えながら話し合われた。過去そして現在に反目し合う原因、そして状況をもつ国同志、あるいは地域同志の代表が卒直に話し合い、謝罪し合うということが個々のレベルではあるが積み重ねられていった。日本からの参加者を代表して住友さん、相馬さんに会議の報告を御願いした。

パンチガーニショック

住友 義輝

◆第三世界の痛み

パンチガーニという地名はインド人でも知る人は少ない。しかしボンベイのホテルの人は、パンチガーニは避暑地でホテルもいくつかあるし、とてもいいところですよと話してくれた。

かって世話になったラジモハン・ガンジーさんが私たちに来るようにということもあり、家内と腰を上げることにしたのであるが、この機会が与えられたことに心から感謝している。

ボンベイの南東一五〇キロのプーナに飛行機で四〇分、飛行場で昨年小田原の大会に来られたフォルブスさんに迎えられ、ステーションワゴンで二時間半、峠を三つ越えて一三〇〇メートルの丘陵に一万本のブーゲンビリヤが咲き競うMRAのセンター、アジアプラトーがある。パンチガーニの町はそこから一キロ余りのところにあるのでセンターからは見えない。

そこで一月三日から一週間、世界の安定は第三世界のあり方にかかっているとして、本当の開発の意味を探り、相互理解と信頼を築くための話し合いが三一ケ国からの二〇〇人によって行われた。

私は二つのことに心をうたれた。その一つは第三世界の人たちの痛みを身近かに感じたことと、もう一つは各国のMRAの人たちによる見事なチームワークである。

現地の人に父親を殺されたが、新しいアフリカ造りに生涯を捧げているイギリス系南アフリカ人のホフマイヤーさんの言葉を借りると、自尊心、自己中心、汚職、ごうまん、偽善、憎しみ、非難、不信、不道徳が世界におこっているすべての問題のもとである。北と南に限らず、南のなかでも、それによって歴史と文化が無視され生活が破壊されている。それを容認し、放置すれば不正は更に拡がり、世界はわれわれが望むところから更に遠のいて行くのである。

途上国の社会に深く浸みこんだ病巣の一つ、汚職についてラジモハン・ガンジーさんが汚職を数パーセント減らせば、先進国の途上国に対する関心は数パーセント増えると、自から正すべきことを問えば、スリランカのお役人も先ず生活の質を正さない限り経済援助、技術協力も根を下さないと答える。エジプトの元大臣は「世界に必要をみたすものは充分あるが、貪欲をみたすものはない」というフランク・ブックマン博士の言葉を上げて、それに問題を集約した。

ここで私は少数民族の人たちを第四世界ということを知った。インド東北の辺境、少数民族の土地ナガランドはインドやバングラディッシュとの紛争が絶えることなく、そこに住む人たちの

悲願は民族の自立である。パンチガーニに来た彼らは信仰によって憎しみから自由になり、相手のことを考えるようになってはじめて希望が持てるようになったと、共に新しい世界造りのために献身している。

ニューデリーの実業家は、いままで南アフリカに対して優越感を持ち、会社では賤民と呼ばれる人たちに対して全く無関心でいたことにここに来てはじめて気がついた。その人たちにこれからどう責任をとるか、インド人全体の責任として考えたいという。インドネシヤの一婦人は心の声を聞いて、職場での遅刻、不正直、不規律を正そうと話し合ったところ、出来高は五〇パーセントも上った。何も特定の人でなければ出来ないことではない。一人一人が役割りを持ち、答を持っているということなのである。

インド、チベット、マレーシヤ、インドネシア、台湾、スリランカ、オーマン、エジプト、モスリムの国々、アフリカの国々などの人たちにステージの上から、あるいは食卓をかこんで聞く話は、彼らの痛みであると共に歴史、文化の重みに裏打ちされた新しい質を求める世界造りの情熱であり、一つ一つに深い感銘を覚えた。

日本が先進国の一人として責任を分担するためには、彼らの痛みを理解することなくしてはできない。彼らが求めるものは物や金にもまして心である。途上国は物と金さえあれば足りるのであって、先進国からとれるだけとっておくのだという見方は両者の関係を損なうばかりでなく、世界の崩壊につながるものであろう。

◆国際チームワーク

いま一つ感銘したこと、それは貧しいインドの山奥にどうして四五〇席の国際会議場と二五〇人のためのバストイレ付の個室、衛生的な飲料水など清潔な生活環境をもったMRAセンターが作られ、維持されているのかという不思議に始まる。

一五年前にラジモハン・ガンジーさんがインドの再度の精神革命を叫んで大行進を行った時、この地をセンターとして選んで以来、拡張を重ねて現容になったという。ガンジーさんと彼を支えるインドの人たちの信念とそれを支持する各国各地からの物心両面の協力によるものである。農場を含むこのセンターの設計はオーストラリヤの人たちの奉仕によるものであり、会議場の四五〇の椅子には寄進した人のネームプレートがつけられ、各部屋、集会室などもマーシィさんの部屋とか、オーストラリヤルームなどと呼ばれている。また運営は会議に参加する人の寄附によってまかなわれ、雨期の二、三ケ月を除いて毎月産業人会議などが開かれるということである。

しかしそれですべてが賄われるわけではない。私はこのセンターの事業が、われわれ企業のプロジェクトであれば到底なりたたないものと思う。

この会議はガンジーさんはじめ小田原の大会に来たマッアーさん、フォルブスさん、ニケツ・イラールさん、「アジアの歌声」の中心となったスレッシュさんなどインドとその周辺の人たちでとりしきっている。しかし会議の裏方をつとめるのはイギリス、ドイツ、フランス、スイス、オーストラリヤ、ニュージーランド、カナダ、アメリカ、日本などのフルタイムの人たちなのである。彼等はパンチガーニに来てこの会議を支えているのであって、ゲストではない。インドの人たちに献身的に協力し、一体のチームワークで会議と一週間の生活は見事に管理され、運営されている。そのフルタイムの人たちの活力はそのうしろの無数の人たちの力によって支えられているのである。

アジアセンターがここに存在する不思議の答はこのチームワークにあることを発見して心から敬意を表した。

日本からは長野清志君たちがこの会議に先立つこと一週間アジア太平洋青年会議を開くことを呼びかけて、各国の青年たちとこのセンターで話し合い、そのあと引続いてこの会議を支援して来た。私たち二人は申し訳ないことながらゲストであり、応分の責を果したとは思っていない。先進国でありながら、世界の責任を分担していない日本の見本のような気がした。

ラジモハン・ガンジーさんはこう言った。「日本は日本人が日本人として日本の繁栄のために重ねてきた業績を世界人として世界の人びとのためにも寄与する必要があるのではないか」。

日本はいまや西欧諸国から経営視察のチームなどを迎えるようになったとは言え、先進技術の開発、その他まだまだ次世代に向けての準備に一層気をひきしめている。しかしもう一つの面、人間としての面について、パンチガーニでとり上げられた「すべての問題のもとは何か」を見つめ直し、自分自身どう対応するかを考えてみたいと思う。

おわりに、この一週間終始私たちに気を配って頂いた相馬雪香さんと、私たちの行くところいつも影の如くについて来て通訳をして頂いた船本三恵子さんに紙面をかりてお礼を申し上げます。

（住友電気工業・常任監査役）

会議で感じたこと

相馬雪香

「このアジアプラトー（パンチガーニのMRAセンターはこう呼ばれている）を皆さんのものと思って下さい。」ラジモハン・ガンジーさんと私達日本の数人がお会いした時、彼はこう言った。そう言われるまでもなく、底ぬけに温かく迎えられる雰囲気で、私達ばかりでなく、ここに来る者はよそへ来たとは思えず、互いに心を開きあい、親しみを覚える。

「日本のアジアに対する関心は精々バンコックまで。それより西には届かない」と誰かが何かの折にフト言ったが、全くその通りだと反省した。今回の「開発のための対話」会議にはエジプト、クエート、ヨルダン、レバノン、オーマン、イラン、キプロス等の中近東の国々からの代表、マレーシア、スリランカ、インドネシア、フイリッピン、中華民国等のアジアの代表、アフリカ、ヨーロッパの人たち、それにホストのインドを加えて三一ケ国から二百人も集まっていた。初対面の人が多く、戸惑いする思いもあったが、会って話をしている内に、人間として誰もが持っている心のやさしさが感じられるのであった。

日の出る前の一時に
消え去る前の一時に
露のしづくはたたえています

遠い歴史のかなたから
数知れぬ思い出の光
その輝きをうけて
自然はこよなく美しい
露のしづくは
仲間のしづくと共に
たたえています

エジプトの年配の詩人がギターをかなでながら哀調をおびた声でうたう。日本の詞にしてもいいようなはかなさを私は感じていた。

「今の総理は正直で立派な人です。しかし、何時まで持ち応えることが出来るでしょう。」拷問に耐える時に使われる言葉をある国の代表からきいて私はギクッとした。それ程政治の世界はきびしいのだ。政治家に限らず、それぞれが純粋さを保つように助け合うのがMRAなのだとしみじみ思う。

一九三九年十二月、日本に一ケ月滞在してくれたビルマのママミー、六九年三月九日このパンチガーニで昇天するまで、世界各地で大きな足跡を残したママミーのお墓へ、スリランカ、インド、マレーシア、イギリスの女性達と一緒にお詣りした。一人一人がママミーに大きく世話になった思い出を持っていた。悩んでいた時、得意で天狗になっていた時、ママミーはどんな時でも必要な心の支えを与えてくれたのだった。

「止まることのない神の計画を信じ、喜びをもって仕えた人、ドー・シェン・タここに眠る」。ママミーの心は今も語りかけてくる。「心にひびいた声に忠実に従うように」と。

自分には出来ないというのは止そう。自我に死ぬことこそ生きることなのだから。

インドに秘められた偉大な可能性を信じ、私も心を開いて行こうと心に決めたのである。

（尾崎記念財団・理事長代行）

狩野岳也

私が今回インドに行った理由は二つある。一つは、私が中学三年の時（三年前）にインドに農業の勉強のために留学をする決心をして、着々と準備をし、あとはビザの申請だけとなった段階で私の身勝手でそれを取り止めてしまい、日本MRAをはじめインドMRAの方々に大変迷惑をかけたといういきさつがあって、いつかそのことを謝まりたいと思っていたこと。そしてもう一つは、インドが古い文化（インダス）の発祥の地であり、今、日本に伝来している仏教もそこを発生の地としている。私はそうした日本とのつながりを実際に目でたしかめたく思い、おとずれた。私は昔からインドという国にあこがれていたこともあるが、主にこの二つの理由で今回はおとずれた。

十二月二十六日、いよいよインド行き、飛行機はもち論エアインディア。最初の予定では船本さんと一緒のはずだったが、旅行会社の手違いで一人旅となった。インドの地に降り立った時、むっとする暑さとともに、異様なにおいが鼻についた。あとで考えたことだが、あれはインドをはじめとするいわば、東南アジア特有のにおいだったのかも知れない。日本と比べれば清潔とはほど遠いが、人間そのもの、いってみれば人間のあたたかみを感じた。ボンベイのMRAハウスに行って、今回のMRA会議の責任者の一人であるニケト・イラルー御夫妻をはじめ、多数の人々と会うことが出来た。ボンベイからプーナまで、列車で約四時間、スリランカから来たスクマ・ロックウッド、それにインドの青年と三人で長い旅をした。その途中で私は、種々多様な景色をみた。近代的な家々、レンガの家、テントの家、そして昔の堅穴式住居を思わせるような土を掘ったものには、ずい分差があるものだと驚いた。駅では日本では想像もつかぬ様な人々がお弁当を売っていた。私はここで「私が日本で

想像していたインドとは違うんだ」ということをはっきりと認識した。そしてプーナから約三時間程タクシーに乗ってパンチガーニへ着いた。すでに時計の針は六時をまわっていたため、真黒で外の影色もなにも見えなかったが、それほど町が発達していないことがわかると思う。今回の大会の会場となったMRAセンター、アジアプラトーは、私がそれまで見てきた景色とは違う近代的な建物であった。帝国ホテルを思わせる大きなキッチンと明るい雰囲気のダイニングルーム。国立劇場とまではいかないがそれを思わせる大きなホール。それらは、これまでのインドを見てきた私にとって想像を絶するものであった。そこで私は、インド人をはじめ、ヨーロッパ・アジアからの若者達と友人となり、いろんな話しをし、農作業をしたり、スポーツをしたりして、それはよい思い出と経験を得た。会議ではあることを決心した。それは、学校で二学期の試験の問題を盗んでしまったことを正直に謝まることだった。

結果的には、その試験の点数は悪かったのだが、やはり悪いことは悪いので正直に学校側にあやまり、学校もそれを認めてくれて、別にこれといった処罰はなかったので、今は心地よい生活を送っている。

最後に、インドというところは、富める者は富み、貧しい人は本当に貧しいということ。カースト制度の名残りであろうか。町を行くボロ服の人々、飢えに苦しむ路上生活者を見ているとこの国の貧しさが理解出来る。聞くところによると、開発途上国といわれる多くの国々が政情の戦争の不安と共に飢えや病気に苦しんでいるということである。我々日本人は、豊かな社会の中で暮しているが、こうした世界情勢を背景に成り立っているという認識を持たなければいけないと思った。

そして日本に帰った今、私は思っている。〝帰ろう、インドに。そしてインドの役に立とう〟と。現在私は数年後の出発のためにいろいろと準備をすすめている。

（高校三年在学中）

インド考

◆聖と俗の狭間で

深沢英雄

布施先生に今回のインド行きのさそいを受けたのは、先生が大学祭での講演を終えられた時だった。（先生が一緒に行かれないと知ったのは、すでにインド行きのチケットを手配したのちであった）。

「始めての海外旅行をよりによってインドなんかに……」という友人も多かった。MRAの会議参加もさることながら、偉大な歴史を展開したインドへの未知のあこがれが私にインド行きを決心させた。会議に関しては、それが日本で開かれようとインドで開かれようと同じだと思っていたし、実際そう感じた。言葉の障害と日本人がマイノリティーであることだけが相違していた。長野さんや後輩の石橋君と密着していたせいか、日常生活をアジアプラトーに持ち込んだようでさ程異和感を感じなかった。会議では親愛なる友人諸兄との会話から得るものが多々あった。しかしながらその時、僕はまだこの国のふところに飛び込んでいた訳ではなく、知識も乏しく、強烈な体験は会議後の一人旅の間に集中し、それは会議の記憶すら希薄にさせるほど強いものであった。しかし、この一人旅によって得た新たな視点から振り返ってみれば、もしも会議前にこの旅をしていたならば、僕にとって会議は全く違った重さを持っていたような気がする。

旅の間、僕はインドの中に自分を溶けこませようとせず、自分の中の日本と対決させていた。インド人たちの視線の中で、わざと箸を使ったことも何度かあった。アグラでカメラを盗まれてからは、インド人に対する不信も加わった。それ以前は疑いの気持を自ら戒めていたのだが。とにかく様々な形でカルチャーショックに直面し、時には嫌悪感に襲われることもあった。

聖と俗との混在。聖地ヴァラーナシィー（ベナレス）での光景。ガンジス河沿いに延々と連なる河中に下っていく階段。その最深部にインドがあった。三筋ばかりの煙、わずかな敷地のまわりに人々がしゃがみ、じっと見つめている。火葬場である。勢いよく燃え上った炎の間隙に足がのぞいていた。その横で、灰なのかゴミなのか、砂煙をたてながら男が河中に何かを掃き捨てている。ハウスボートの群。階段で冥想している者。水中に立って祈っている者の間で平然と石鹸で体を洗う者、食器を洗う者。河水を飲んでいる者。そのむこうには、衣類を器用に腕を回転させてかたわらの洗濯石に打ちつけているクリーニング屋の集団。ペタン・ペタンという音が日の出前から聞こえる。死んだ家畜がボートから投げ捨てられようとしている。それをつつくコンドルの群れ。子供は白い布でくるんで焼かずにやはり河に流す。

様々な出来事が一つの河を舞台に同時進行している。このインドに対して、我々は一体何が出来るのだろう。そのうち体が拒絶反応を示したのか、ヴァラーナシィー以降インドを出るまで十日間、微熱が続いた。

（裏へ続く）

◆心を援助するMRAの役割

後半からインドを通して日本を考えることが多くなった。いろんな日本人に出会ったせいもある。国際釈迦仏教教会の勝見先生にはブッダガヤ・ラージギルを案内していただいた。先生によるとインド人のモラル悪化の一因は日本人観光客、特に団体客であるらしい。インドと日本を同じに考え、価値感の違いを認識していないらしい。しかしインド人も貨幣の価値と適正な使用を知っているのか疑問である。ある日本人がブッダガヤの近くのある村に無償奉仕で電気を引いた。それを利用し始めたにもかかわらず、村人達から感謝の言葉はついに聞けなかったらしい。

日本寺の中に、日本でいう幼稚園にあたる〝ぼだいじゅがくえん〟がある。日本式の躾を取り入れ、例えば食事の前後には合掌を行なう。

さて話をしたインド人の中ではこの国をより良くするためには、教育制度の改革が必要だと言うものが多かった。高学歴の者程強調した。教育が普及すれば人口問題や衛生の問題は自然に解消するとさえ言った者もいる。

ある新聞の片隅に、インドに対する日本の経済援助の記事が出ていた。主に鉄道に対してである。インドの鉄道に極度の不満を持っていたため、それを見た時に単純に喜んだ。しかし、それはただ便利になるだけであって、インドの現状改革の本質ではないことに気付いた。大切なことはインドそのものの質の向上であり、そのための教育の充実が最も必要なのだと思った。日本の援助も真のニーズに応え、例えば教育の分野で出来ないものだろうか。教師の養成サイクルに海外在住期間を設定するのも一案と思う。そうすれば日本の外国語教育の充実と海外における日本の理解に貢献できるだろう。また教師が子供達に実際の海外体験を伝えることが出来、国際化社会にふさわしいものといえよう。

しかし、ここで私は考えこんでしまった。それがかつての皇国教育のように日本型の押しつけであってはならない。当地における伝統、文化を損じるものではなく、健全な発展を促進するものでなければ真の援助とはいえないだろう。否定ではなく、包括もしくは改良である。また日本の英語教育のようなものであってはならないことは当然である。

インドにおける最大の欠如は〝信頼〟であると痛感した。インド人の相互不信、利己主義、サービスにおける信用と価値感の欠如、これらが解決されねばインドの発展はないと思った。そしてこれは心の問題である。

世界的に見ても、援助においてソフトウェアの占める比重が高まりつつあるが、物の使い方だけでなく、使う人の心や発想を変えることも大切である。原子力も、ずさんな管理を許す心、悪用しようとする心があるから危険なのである。カーストの問題にしたところで、小さな子供に貧富の差は実感出来ても身分の差が分るわけはない。誰かが教えるのだ。発想は教育によって植えつけられるものと信じる。

最初に我々のなすべきことは、すべての人間が共鳴し、納得出来る行動の基準の確立である。信用し、理解し合うための土俵の設定である。すべての人間が話し合わねばならない。MRAはその主体となりうる力を持っていると思う。

（横浜市大四年在学中）

国際MRA日本協会昨年の動き

2月 ハウス移転、ゴードンワイズご夫妻来日

日本におけるMRA活動の発展拡大にともない、それまでの代々木のハウスが手狭となったのでもっと広いハウスをと望んでいたところ、水戸の星さんの御厚意で現在の田端のMRAハウスをお借りすることになり、2月9日に浦和の北口さんのご協力で無事引越すことが出来た。又、折から来日されたイギリスMRA理事長（当時）ゴードン・ワイズご夫妻をお迎えしてオープニングパーティーを催すことが出来、多くの方に来ていただいた。

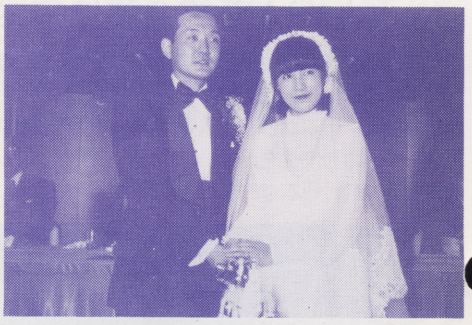
◀オープニングパーティー

▶MRAハウス引越直前の旧代々木

6月 MRA国際会議、藤田夫妻結婚

6月4・5・6・7日と小田原のMRAアジアセンターに於て、第5回MRA国際会議を開催した。〝新時代の国際チームワーク〟のメインテーマのもと、12ケ国32名の海外代表を混じえ多くの人が会議に参加した。今年も同じMRAアジアセンターで、6月4・5・6日に第6回MRA国際会議を開催の予定である。6月14日には当協会事務局長（当時）の藤田幸久さんが星玲子さんと、青山のセブンスデーアドベンチスト教会で多くの方々の祝福を受けながら結婚された。

◀韓国代表団（小田原会議）



▶結婚披露宴（日本青年館）

7月 藤田夫妻を英国に派遣

海外との交流の拡大に伴い欧州駐在員設置の必要性が生じ、7月1日、藤田夫妻がその任に着くべく、ロンドンへ向けて飛び立った。

これによりヨーロッパ地域において日本のMRA関係者の受け入れ、連絡等がスムースに行くようになり藤田夫妻も多忙な日々を送っている。尚、今月5月にはMRA国際会議準備のため一時帰国の予定である。参考までに、事務局長の責は長野清志さんが引きついだ。

8月 MRA世界会議に50余名の日本代表団参加

7月よりスイスのコーで開催されているMRA世界会議に、昨年も50名を超える日本代表が参加した。民社党竹本孫一衆議院議員ご夫妻の出席とその積極的な発言の数々や、昨年で5回目の訪問となる高瀬顧問をはじめとする東芝労使代表による率直な日本の立場の表明も、経済摩擦に苦悩する欧州と日本の理解のギャップを埋める大きな役割を果したと言えよう。

▶政治家会議より

昭和56年度定期総会を開催 ▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷▷ 9月

昭和56年度国際MRA総会が、9月26日、六本木国際文化会館に於て開催された。事業報告、会計報告等が承認されたのち、引き続きコー世界大会参加者の報告に移った。浦和から10名のグループを引率された榊たか子埼玉県会議員は、「確信を持った人が3、4人いれば何でもできる、自分もその確信を持てる一人になりたい」と述べられた。グループに同行した光武孝文さんは「〝絶対無私〟という言葉を自分の一生の言葉としたい」とコーの感想をしめくくった。

10月 ◁◁ 神戸で関西MRA大会開かれる

◀全体会議より（関西）

▲加藤シヅエさんと若者達の懇談（総会）

10月3・4日にかけて神戸の住友住吉研修所を会場に、恒例の関西MRA秋の大会が開催された。幸い好天にも恵まれ西日本各地、又、九州からの参加者を主に70余名の出席を得た。短い限られた時間の中でMRA精神の全てを理解することは大変困難なことであるが、率直な意見の交換の中から共通点を見出し、相手を思いやる心が養えるのではないだろうか。関西の大会が規模は小さいながらも光るのはここである。日本でもチェンジすることは可能なのである。

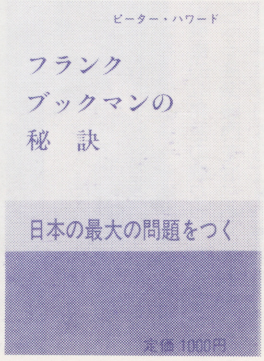
インドMRA青年会議に日本から参加 ▷▷ 12月

アジアの若者達が、その将来を共に考え幅広い国際チームワークを創るという趣旨のもとインドのMRAセンター・アジアプラトーで12月末から開催されたアジア・太平洋青年会議に、日本から若い人達を中心に代表が参加した。日本の同世代の若者達がそのエネルギーの方向性を見失い、空虚な浪費をしている同じ時、アジアの一偶でこの様な会議が開かれ、日本からも代表を派遣出来た意義は彼らが考えている以上に大きい。

▶MRA青年会議に出席した世界各国の若者たち

11月 「フランク・ブックマンの秘訣」出版 △△△△△△△

数多いMRA出版物の中でも古典とも言うべき〝フランク・ブックマンの秘訣〟（ピーターハワード著、相馬雪香訳）が再出版された。〝ブックマン博士は共産社会も、非共産社会も、同じ点で失敗していると信じていた。すなわち、どちらも利己心から完全に自由な新しい型の人間をつくることができないということである。しかも今日の原子力時代に世界が直面している非常な危険と大きな可能性にかんがみて、これからの世界の運営にはどうしてもそうした新しい形の人間が必要なのである〟。（本文より）



LETTER from abroad……2

写真・資料はアイスランド共和国名誉総領事館のご好意によりお借りしました。

アイスランドへの旅

マリー・クロード・ボーレル
（スイス）

◆二度目の訪問

私達、つまりマダム・イレーヌ・ロー、ゲルド・ヨンセン、アンローネ・ウーレンホルト、そして私マリークロード・ボーレルが最初にこの国を訪ねたのは一九七四年の二月ですから、今回の旅（一九八一年十月十二日～二十六日）は七年振りのことでした。前回の訪問以来何人かのアイスランド人とは連絡を交してはいたものの、今回私達は誰からも招待されていた訳でもなく、時期的には旅には適さない季節だと助言を受けていました。旅費は非常に高く、40～50％という物価の暴騰でアイスランドの生活も決して楽ではないようです。

イレーヌは以前からしばしば、アイスランドのような他国から離れ小さいけれど戦略上重要な位置（完全非武装国家であるが一九四九年NATO加盟、米軍が駐留、NATO防衛線の最前線拠点になっている）にある国の人々に、私達がどれほど心を配らなければいけないかということを口にしていました。

今回の訪問もそういったことの実践である訳ですから種々の困難はあったものの、私達は確信を持って訪れたわけです。そして私達が想像し希望していた以上のことが待ちうけていました。

一九五〇年代にスイスのコー、アメリカのマキノ島のMRAセンターに行った最初のアイスランド代表団の方々に接触したり、また思いがけず多くの新しい友人を作ることが出来ました。日ごとに神様が大学の人々や文化人達そして商業、通信関係、外交、教育、医療、政治といったアイスランドの生活の中心ともいうべき人々に導いてくださるのを感じたことです。そして彼らが実際のところいささか他国から孤立していたように感じ、私達の訪問を大変感謝してくれているということに気がついたのです。多くの女性達にも会いました。そして彼女達が世界の問題に大きな関心を持っていることに感銘を受けました。

ヨーロッパや中東の緊張が高まっている現在、多くの人々の関心は世界平和に集中していました。多くの女性がいろいろな手段で、そして平和の為のデモンストレーションによって何かを勝ち得ようと努力していました。

イレーヌは、彼女が憎んでいたドイツ人に戦後、その憎しみを謝罪することにより両国の和解に努めた自分の経験を通して、平和を言葉だけのものから意味を持ったものにするには、代償を支払わなければならないことを話しました。レイキャビク・ディリィー・チミン紙は〝どうやって平和を築くか〟という見出しで、アイスランドで唯一のMRAについて書かれたすばらしい記事を載せてくれました。

◆二人の大統領

アイスランド最初の女性大統領ビグジス・フィンボガドチル女史との三十分間の会談で、前進のための基礎となる「憎しみ

の克服」について話し合いました。ビグジス大統領は流暢なフランス語でイレーヌとの会話を楽しまれ、イレーヌがアイスランドにかたむける情熱のため再度訪ずれたと聞かれて〝私達は同じ情熱を持っているようですね〟と感嘆されました。首相は特に若い世代への強い関心と同情を示されました。「私達は、彼らが将来に夢と希望を失ない暇つぶししかすることがない、という風にはなってほしくないのです。これは彼らが私達のつけた道をただ無条件に歩むということだけでなく、沈滞の原因ともなるからです。私は彼らが彼ら自身の道を見つけ、そして私達の文化の根とも言えるべきものを再発見してくれることを願っているんです」と語り、また女性が家庭の中で外で、そして特に子供達が母親を必要としている時にどんなに力を発揮できるかを深く信じているとも強調されました。又彼女の九才になる娘の話や家庭生活についていくつか話していただきました。

八一年初頭、ビグジス大統領がデンマークを公式訪問された。コペンハーゲンで開かれたデンマークのマルグレーテ王女とビグジス大統領による記者会見の席に参加していたアン・ローナはこの記者会見がジャーナリストのみならず、デンマーク人全体にどれほど大きな意味を持っていたかを語りました。首相はその訪問により二つの国がより緊密になった、そして私達アイスランド人は一も二もなく私達が北欧の一員であることを忘れてはならないと感じたとおっしゃいました。

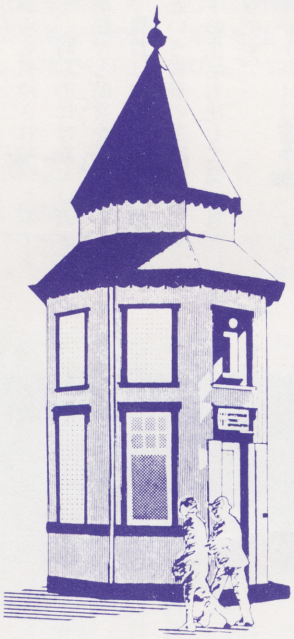
今日の世界に於ける重大問題を語るうち、彼女は彼女自身がこれらの問題に対してどちらかと言うと楽観していると言われました。

「完ぺきな現実主義者の私としては、事態を悲観的に見るべきなのでしょう。しかし、ボンで大平和集会が開かれた翌朝、私は何か救われたような気持ちで目ざめました。二五万人というアイスランドの全人口を上まわる人々が平和のためにデモに参加したのは、きっと人々が道理というものに気がつきはじめた証拠だと思います」。

前大統領クリスチャン・エルジャルン博士は、ヨーロッパにおける平和運動をより一層注意深く見ていた。政界からは引退したものの今だこの国の第一線の学者として、国立古代美術館長などを経て表立った活動をしています。彼は私達を家へ招き、ヘルドラ夫人と昼食を御馳走してくれました。博士は、幾つかの平和運動は事態をより悪化させる可能性があると意見を述べられました。又、アイスランドにはまったく独自の防衛手段がないのだからアメリカの存在がなかったら、我々が北大西洋におけるこの位置を独自に保つことはとうてい出来なかったと確信を持っていました。

「アメリカ人達の振る舞いは良かったし、正当なものでありました。しかしながらスカンジナビア同胞諸国によるアイスランドとアメリカの関係への誤解と理解不足にしばしば心を痛めています」。

博士は世界的なMRA活動についてたくさんの質問をされました。博士と夫人はブラジルやジンバブエでのMRAの働き、そしてそれにましてイレーヌ自身の家族の話しにとても感銘を受けていました。



◆出会い

私達は町の事情に不案内だったので、町のインフォメーションサービスにしばしば通い係の女性と仲良くなってしまいました。

彼女もデンマークで地下抵抗運動をしていてドイツ人を憎んでいたので、イレーヌとの出会いが彼女をずいぶん助けてくれたと打ち明けてくれました。

私達は何度も人々の家に食事やアイスランド風の午後のコーヒーに招かれました。そうして人々の生活の内面をより良く知ることが出来たのです。「決して、アイスランドの人々とうわべだけの話を長く続けることは出来ない、彼らはすぐに深い問題にふれる機会を与えてくれる」とイレーヌも語っています。

アイスランド人はしばしば外国で勉強したり仕事をするので、皆一度は海外生活を体験するそうです。私達が会った人々の何人かは海外でMRAを知った人々でした。どの話を聞いても彼らがMRAの人々から真の思いやりを受け、心を開いたというものばかりでした。そうして今、彼らは彼らの最善を私達につくそうとしてくれてMRAについてもっと知りたいとも願っていました。

ゲルドの父、ダグ・ストロンバックが生涯をかけて育てたアイスランドの人々との友情は私達の訪問により一層の重要性を加えました。彼らは一九二六年に大学院生としてアイスランドに来て、初のスエーデン人講師として大学で数ケ月間働きました。彼と幾つかの家庭に交された友情は彼らの息子や孫たちの時代にひきつがれ、そのお陰で私達はアイスランドの歴史と北欧の武勇伝説の古い筆写原稿のための調査協会のアパートに住まわしていただき、ある日私達はこれらのすばしい国宝を拝見することが出来ました。それら

の幾つかはこの十年間にデンマークから返還された物でした。

アイスランドの歴史の物語は私達をとりこにしました。アイスランドが西暦千年にキリスト教を国教に受けいれることを平和裡に国会で決める以前は、オーディン（知識、戦争の神）とかトル（雷神）で知られる北欧多神教を信仰していたことやこの国の文学の功績の偉大さなどです。又アイスランド語は近代ヨーロッパ語の中でも最古の型を保っている言語として知られています。それ故アイスランドの人々は今でも八百年も前に書かれたサガ（ノルウェーからアイスランドへ植民してきた人々の系図と功績を歴史的しかも客観的に扱った散文、アイスランドの起源に関する記録）を楽に読みこなすそうです。このような秀れた文化的遺産が今なお人々の生活の中にとけこんでいる様を見るのは驚きでした。

教育の程度が高く、文盲率ゼロというのも頷ける話です。又この国の国会（アルシング）が九三〇年創立で、世界最古であることは余り知られていないようです。

アイスランド前主教のエイナッソンさんは、昔の人々が悪魔についてどれ程はっきりしたアイデアを持っていたかについて、面白い話をしてくれました。昔の人々は悪魔が並々ならぬ力を持っていることを知ってはいたが、神はいつでもそれ以上に強いことを知っていたので悪魔を少々あざけることが好きだったそうです。ある古い物語によると、一人の学生がフランスからアイスランドに帰る際、悪魔と取り引きをしたそうです。彼をまったく海の水でぬれさせることなく家まで運ぶことが出来たら彼の魂を渡すというものです。さて、悪魔が彼を背中に乗せて海を泳いでいる時、彼は一日中聖歌の詩編を読んでいたそうです。

やがてアイスランドの海岸に充分に近い所まで来た時、彼はその分厚い本で悪魔の頭をたたき悪魔を海底へしずめ、岸まで泳ぎつき無事家に帰ったそうです。私達はこの戦いの精神を今日のアイスランドの人々の中に感じることが出来ました。私達はこの旅行を通じて、神がアイスランドの自然にそしてそこに住む人々の中にも沢山の未開発の資源を持っていることを感じました。

シリーズ

あの時、この人―旅のエッセイ

私が体験した三年間の海外生活

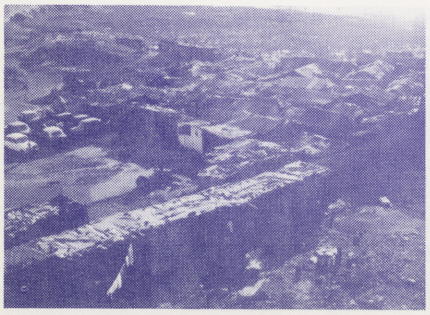
その一・・・インドへ渡る

市原登志子

◆インドに向う

〝インドへ行きます！〟、そう言って大きく首をたてに振り、家族や友人たちを驚かせたのはもう三年半も前のことになります。

それまではオーストラリア行きを希望していたのでインド行きを勧められた時はふとためらったのですが、五分とたたないうちに皆の前で宣言をしていたのでした。何もその時確固たる信念があったわけではありません。多分、グットアイデアくらいにしか受けとめていなかったように思います。さてインドに対して関心も知識もないまま日本を後にすることになりました。空港での別れがとてもつらかったことをよく覚えています。その時、自分の心の中で簡単には帰ってこないぞという決意がわきあがると同時に、その時初めて定めのようなものを感じたのでした。自分の将来に不安を抱



いていた私は、この旅で必ず何かをつかまなくてはと自分に言い聞かせ続けました。

◆トレーニングコース

インドはマハラシュトラ州のパンチガーニという山間の村にあるMRAのアジアセンターが私の最初の訪問地でした。そこでまず、若者達のために準備されたばかりのトレーニングコースに参加しました。〝効果的な生活の中で様々なことを共に学びあう〟というスローガンのもと、ボンベイ、マドラスなどからはインドの若者達、外国からは私とノルウェー人の兄妹が参加しました。そのほとんどが16才くらいの好奇心の旺盛な学生たちで、自分の意見をはっきりと表現していました。私は英語がしゃべれなかったし、日本人はめずらしかったらしく大切にもされましたが、反面、よくいじめられました。又、インド人の問い詰めるような話し方は私に恐怖心さえいだかせましたし、よくくやし涙を流したものです。ある晩のミーティングの席上、ある学生が私のそれまでの行動をずっと見ていたらしく、〝日本人てとても礼儀正しいのですね〟とほめてくれました。そう言われて気分をよくしていた私に、ルームメイトのサノ（インド東北部のナガ地方出身）から〝あなたはそうしていつでも日本の代表として見られているのよ〟と言われた時、その意味の重さを感じざるを得ませんでした。

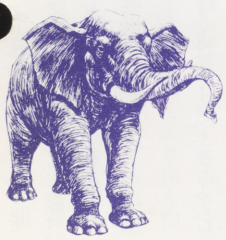
新しいものを取り入れるのがとても苦手な私は、朝早く起きて心の声に耳を傾けて、神の意志を仰ぐというMRAの教えを受け入れることは容易ではありませんでした。しかし私が重い病気にかかった時、サノが寝ずの看病をしてくれ、早朝熱いインドティーと共に快い目覚めを与えてくれた時、朝のひと時を持てました。しかしながら、今度は心理的な抵抗を感じた私に、このコースの責任者であるビジェさんがアドバイスしてくれました。〝オーケストラが演奏をする前に音の調節をしなければならないのと同じで人が目的をもって正しく効果的に生きるために、忙しい生活にとび込む前に持つ朝の静かなひと時を持ち、前日の行動やその動機を反省し、今日一日を考え、将来の方向を見つめる時間が必要なのよ〟。

◆心の扉を開く

インド内外の情勢の講義を聞き、ドラマを作り、ダイニングルームのサービス、太陽熱を利用した料理法やいも掘りなどの農作業、孤児院訪問、工業都市プーナでの労使訪問などと続いたコース最後のプログラムは、マハラシュトラの北隣りグジャラーテ州への研修旅行でした。私達はガンジーアシュラムという近世インドの偉人ガンジーを祭ってある聖堂を中心としたひなびた部落にある教師養成所でお世話になりました。そこで私達はインドの貧しい村の生活を体験することが出来ました。手のひら程の葉っぱを食器がわりに食事をし、濁った留り水を飲み、コンクリートの床に寝るという私をはじめこのコースに参加した裕福な家庭の学生たちにとっては原始的ともいえる生活を4日間しました。固い床の上で横になるとヤモリやカやノミなどとの戦いが始まります。身体の具合をくずした人もいました。しかしこの貴重な自然の生きものたちとの出合いとその克服が、後にインドでの滞在をのばす大きな理由となりました。〝今までどんなに両親からものを買ってもらってもこれで充分なんて思ったことはなかった。でもここで物質的には無に等しい人々を見、共に住むことにより物質に対する考え方が変ってきた〟。ボンベイの大富豪の娘サビンはこう言った。何不自由なく育ち、しかもそれを当然と考えていた一人の女の子がはじめてそれに疑問をいだき、自分に対する新しい認識が生まれ、相手の立場への理解を示したのです。この国の大きな問題である貧富の差、都市と地方のギャップ等に対してここでの貴重な体験が役立つことをそして将来への希望の火となることを強く願いました。

コースは終り解散の時を迎えました。この悩める大国インドはいつのまにか私の心の扉を開けていました。日本を発ってからすでに三ケ月が過ぎようとしていました。

（続く）



御案内

国際MRA日本協会は、倫理性と調和をもった世界作りのため、世界のMRAチームとの連繋のもと諸般の活動を行っております。毎年開催される国際産業人会議もその一環であり相互理解と信頼の絆は年々強まっております。他にも人材育成のための研修生の海外派遣、研究会、講演会の開催等々、日本人の『心の開国』を推し進めるために活動しております。ぜひこの活動にお加わり下さい。御入会下さった方にはニュース初め各種会合の御案内をさせて頂きます。

一、会　費

個人（特別）月額一口一〇〇〇〇円

個人一口　五〇〇〇円

法人一口　五〇〇〇〇円

（共に年額）

一、払込先

第一勧業銀行代々木支店

（普）一六三—一〇一四

三三六

住友銀行新宿西口支店

（普）二五九—四一八三

七九

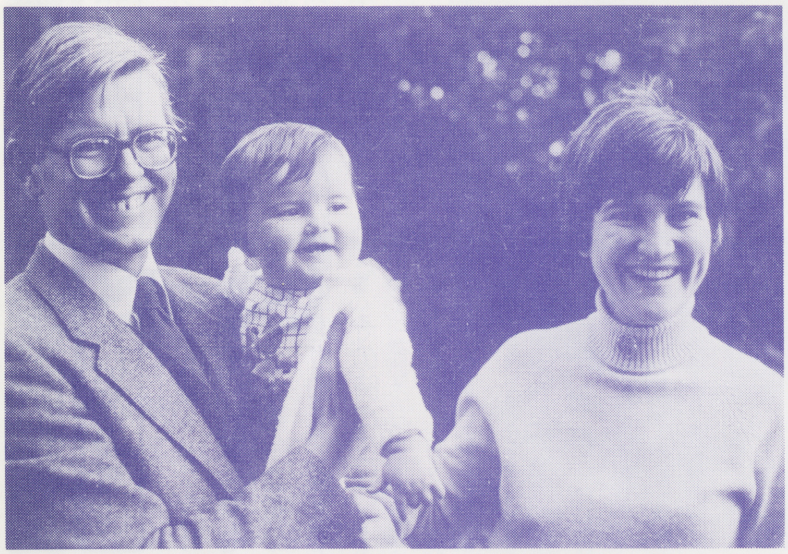
富士銀行動坂支店

（普）八六一—二二〇

国際MRA日本協会宛

ジェフリー・クレイグ夫妻四月来日

■日本MRAの活動に参加、滞在予定二年■



藤田事務局長夫妻が、欧州駐在員としてイギリスに赴任して以来、はや半年の時が過ぎました。夫妻はいわば、日本の民間外交官として主にヨーロッパを中心に活躍を続けています。いずれ報告の機会もあると思います。

さて、そのお返しという訳ではありませんが、私達はイギリスから一組のカップル（プラス一才の息子）を迎えようとしています。

現在ビザの申請中ですが、両人も私達も四月中の来日を望んでいます。二年間滞在の予定で、田端のMRAハウスの二階（事務局は隣りの建物に移る予定）に住むので、いずれ皆さんとお会いすることと思います。すでにイギリスにおいて日本語の勉強をスタートしたと聞きます。皆さんに夫妻のことについて少々ご紹介したいと思います。

さて、前述のとおり夫妻は、フイリップという昨年二月に生まれたから丁度満一才の息子さんを連れての初来日です。（もっとも奥さんは結婚前、一九六五年前後に六週間を日本で過ごしています）。環境の異る日本で子供を育てるということは大変なことと想像しますが、この点皆さんの暖かいご理解と格別のご協力をお願いしたいと思います。

ご主人の名前は、ジェフリー・ウィリアム・クレイグ。通称ジェフとでも呼べばいいのでしょうか、その辺は彼の希望で。一九四四年生まれというから現在三七才。重厚なたたずまいの中に歴史の重みを感じさせる街、スコットランドはグラスゴーの出身です。奥さんはベロニカ・マリー・クレイグ。イギリスの工業都市マンチェスターの生まれです。一九七五年五月十七日、イギリスで結婚。両人とも学校卒業以来、MRAフルタイムワーカーとして世界各国で奉仕活動に従事して来ました。ジェフリーさんは、母国イギリスはもち論のこと、オーストラリア、パプアニューギニア、フィリッピン、ホンコンで働き、そして今回の日本訪問です。アジア太平洋地域で培ってきた貴重な体験の数々がこの日本で充分に生かされることを願います。ベロニカさんも海外生活は長く、アメリカを皮切りにフランス、インド、結婚後はご主人と共にフィッピンとホンコンに二年間滞在しています。尚、ベロニカさんはピアノが得意なので、いずれ聴かせてもらう機会をぜひ作りたいと思います。ジェフリーさんは科学が専門で、グラスゴーの大学で科学を学び、そこを次席で卒業したのち、ロンドン大学で科学修士号を取得している秀才です。日本語もその調子で上手になることでしょう。現在田端のハウスで毎週一回、金曜日の午後六時より行われている英語教室に、ぜひ特別講師としてお願いしたいと考えています。又、六月に小田原で開催される第六回MRA国際会議の準備、運営にその活躍が早くも期待されています。日本におけるMRA活動強化の手伝いはもち論のこと、藤田夫妻同様イギリスと日本を結ぶ民間外交官の一人としての役目を果たすべく、日本の文化や社会を充分時間をかけて見てもらえることはまことに喜ばしいことと思います。MRA、いや日本のためにこの様な大きな戦力を送ってくれたイギリスMRAチームに心より感謝を表します。これからの二年は夫妻にとって決して平担な道ではないと思いますが、きっと何かやってくれる両人であると信じます。我々一人一人の決意とバックアップがその環境を作るのだということを最後に強調して、クレイグ夫妻の紹介をおえます。

（S）

日本に眠る弟を訪ねて……エルシー・キャンベルさん来日

HUMAN

戦争の傷跡を理解する私達の責任

オーストラリアはシドニーに住むエルシー・キャンベルさんが来日したのは、昨年の秋も深まった頃である。彼女は横浜の戦争捕虜の墓地に眠る弟さんの墓詣りをかねて、観光で日本を訪ずれたのだった。その時のエピソードをご紹介したい。

◆弟さんの死

エルシーさんは、オーストラリアで体育の教師をしていた。長女である彼女は親がわりとなって弟達の面倒を見ていたが、第二次大戦中に弟の一人を海兵として戦線に送ったのだった。彼の乗った船は、ジャワ沖で撃沈され、日本軍の捕虜となった彼は、ビルマの泰面鉄道の工事に従事させられた。この頃の話は、映画「戦場にかける橋」によってよく知られている。その後、日本国内での労働力の不足に伴い、彼を含めた捕虜たちは船で日本へ送られた。その途中、魚雷を打ち込まれ船が沈んだり、様々な状況の中をくぐりぬけたのだった。日本到着後は、製鉄所で働いていたが、終戦の前の年の冬、肺炎を患い、故国から遠く離れた異郷の地で、息を引きとった。その弟さんの霊を弔うために、エルシーさんは三六年目にして初めて日本を訪ずれたのである。彼女の心境にどの様な変化があったのかは、よくわからない。彼女の父は、日本人を大変憎んでいたが、MRAを知ることにより亡くなる一年前に日本人を許すことを受け入れた。又、エルシーさんも不動産を売却したお金を寄付し、MRAを通じて世界平和の為に働く六人の若者を育てる資金にしたということである。

横浜から近い保土ケ谷にある外人戦争捕虜の墓地は、まるで別世界のような静けさの中にある。オーストラリア人墓地のまわりには、母国から運ばれたユーカリの木がうっそうと繁り、小さな森をつくっていた。弟さんがオーストラリアを想い起す景色の中で眠っていることを、彼女は大変喜んでいた。

管理人から弟さんが亡くなった時の状況をしめす書籍を手渡され、目を通していたエルシーさんは、簡潔に事実だけをわれわれに話してくれたが、われわれを傷つけまいとする心くばりをその端々に感じた。その場を去るにあたり彼女はこう言った。「弟は最後まで明るく、歌を忘れませんでした。ビルマでは、日本人とテニスの試合をして勝ったと手紙をくれました」。彼女が、ほほ笑みを持ってわれわれの前に立つようになるまで、どの様な心の葛藤が心の中にあったのだろうと考える。

◆シン将軍の話

今年の一月に参加したインドのMRA国際会議でも次のような話を聞いた。

「インドのシン元将軍は、三年間マラヤで日本軍の捕虜になった。それはいうまでもなく苦しい体験であった。その後、イギリス軍がその地を再び占領し、日本軍が裁判にかけられることになった。シン将軍たちは法廷で証言をすることになった。当

時その軍区の司令官だったシン将軍の兄は、悪いのは戦争であり、日本人だけを責めるべきできではない、と部下であり弟であるシン将軍を諭した。シン将軍は、どんなにイギリス軍に促されても一言も悪い証言をしなかったという。その後、日本軍司令官がシン将軍の兄を訪ね、深々と頭を下げ、涙を流しながら深い感謝の意を表したという」

わたし達は、何と多くの人々の善意と許しに支えられて生かされているのだろうと、感ぜずにはいられない。もち論、今日に至ってなお、日本人から受けた受けた苦しみや迫害を忘れず、怨恨をあらわにする人達がいるのも事実である。戦後生まれ育ったわれわれは、戦争で苦しんだり亡くなった人達に直接関係があるわけではない。しかし、その人達の苦しみや他人をおもいやる心、許す心を養わずして、真の国際間の理解や協力はありえるのだろうか。傷つき苦しんできた人達の体験を次代にひきつぎ、そして広げて相互理解の輪を作り上げる責任を感じて止まない。（F）

エチオピアの青年に教えられたこと

Y・S（大阪）主婦

エチオピアから亡命した一人の青年がMRA関西秋期大会に参加した。エチオピアがソ連の支配下にあることは聞いてはいたが、突然私の心にアフリカが飛び込んで来た。現在彼は在日韓国人の経営する小さな自動車修理工場で働き、その研修所で技術を学んでいる。

「エチオピアの首都アジスベバにある日突然ソ連の軍隊が町中に溢れた。どこから来たのか分らない。まず政府の経済教育大蔵省に従事するもの、政府関係者六〇名が銃殺された」と言う。彼の父もその犠牲者であった。高等教育を受けている者は次々に処刑されたので、技術大学の学生だった彼は友人三六名と共に昼はヘリからの銃撃をさけ、夜はジャングルを縫って国境を越えケニヤに亡命した。途中四人の仲間が死んだそうだ。船に隠れ、ギリシャ、ドイツを通りアメリカでも生活したが、日本は人情の温かい国と聞きイタリアを経て二年前に来日した。国ではサッカーのナショナルチームのメンバーであった彼は、今の三倍以上の給料でサッカーのコーチに誘われたが、サッカーだけでは将来がないとそれを断ったそうだ。技術を身につけ一人前になるのが彼の早急の望みである。日本語は喫茶店、お好み焼屋どこでも二時間も三時間も座って他人の会話を毎日聞いて覚えたという。

今はテレビニュースも八割方理解出来る。一八才で亡命し現在二六才。オリンピックの勝者アベベの様に精神もまた強靭である。

日本はこの青年の期待と信頼に応え得る現状だろうか。インドシナ難民を助ける会会長相馬雪香さんは「難民は国の宝ともなり得る」と言われた。私は余りにも世界の情勢に無関心であった。無関心は愛のない事の証明である。彼らがなぜ難民とならなければならなかったのか、私達一人一人の罪のあらわれではないだろうか。参議院議員柳沢錬造氏は「真の大国とは他国と分かち合う心を持つ国である」と言われた。日本がその大国になるだろうか。MRA創始者フランク・ブックマンは一九五六年最後の日本訪問で「日本の繁栄を感謝しなさい。アジアの貧因を忘れてはいけない」と言われたという。日本がアジアのいや世界の燈台となるためには心の声に耳を傾け「あなたならでは」の分を果たす決意とそれに従う着実な歩みを今から始めなければならない。

未来に向かって生きているこの青年から私は多くの事を教えられた。この若者の家族と故国そしてアフリカに光のさす日を願うと共に、この青年もいつか神の召命に応えて世界の将来を背負う若者の一人に成長してくれることを心から祈るのである。

声

皆様の
ご意見を
お寄せ下さい。

事務局が移転しました。

今回のクレイグご夫妻の来日、滞在により田端のハウスの二階を住居としてご夫妻に提供することになりました。そのため事務局は4月3日をもって隣の建物に移動しました。

尚、住所・電話番号等は従来のとうりです。

会議のお知らせ

来る6月4日（金）から6日（日）まで小田原で、そして6月10日（木）は大阪で、第6回MRA国際会議が開催されます。〝いまこそ道義と精神の開発を—すべての人、すべての国の新しい役割〟をメインテーマに、様々なことがらについて話し合われます。

海外からも多数の代表が参加の予定です。国際相互理解の促進が急務とされる今日、一人でも多くの方々のご出席をお待ちしております。会議についてのお問い合わせは、MRA国際会議事務局〒113東京都文京区千駄木4—13—4 TEL03（821）3737（代）までお願いいたします。

◆階級闘争

階級闘争は否めない事実である。しかし現実としてこれを認めることと、その激化によってよりよい未来を切り開く手段とすることとは別である。階級闘争の最終的帰結は労働者階級と資本家階級がバリケードをはさんで対立するというのが、百年前の処方箋であったが、今日ではそれが共産主義陣営と資本主義陣営の核戦争による対決である。どちらかの機構が危機に頻した場合、核に頼らないという保障はない。核戦争のあとに残った廃墟がよりよい未来の基礎になろうとは信じがたい。

ソ連の教授フィョードル・ブルラッキーはソ連の外交政策に関して半ば公式的な立場で、核戦争が今までの戦争とは質的に違うことを示唆している。「あらゆる経済活動の可能性が破壊されてしまうその結果、廃墟化した国土の価値はゼロだ。」と彼は結んでいる。

クレムリンの人たちも、あらゆる状況のもとでの階級闘争の激化には二の足をふんでいるようだ。外国共産党との関係を担当している政治局員候補のポリス・ポノマレフは「資本主義の危機は階級闘争を押し進めるのに役立つ」としながらも「核の時代では、ファシズムの強化は第二次大戦以前より人類にとって、より危険だ」と警告を添えている。

階級闘争の問題は何も国際関係の分野のみに限られているのではない。ドイツの哲学者ヨルゲン・ハベルマスは「マルクス理論の二つの大事なカテゴリー、すなわち階級闘争とイデオロギーを、もはや無条件にあてはめることはできない」と書いている。その理由の一つとして今日、西欧での反体制的抗議運動は、階級に根ざすよりも様々な恵まれないグループからでてきている。その先頭に立つのはほとんどが学生で、彼ら自身恵まれた人々の子弟であるという。

あるドイツの学生リーダーはこう言っている。「ドイツでは少数派の意見など、何らかの刺激的な行動にでない限り、誰もみとめようともしない。」

複雑で面倒な西欧の社会は簡単には動じない。「言論や集会の自由が完全に守られている国ですら巨大な党機構が市民の声を圧しつぶしてしまっている。」とハンナ・アレンデトは書いている。大声でわめかず、戦おうとしない者は多くの場合、無視されるか利用されている。ノルウェーの看護婦はそのよい例である。病人の世話をすることは崇高な仕事であるにもかかわらず長い間、低賃金で働らかされている事実に人びとは無関心であった。ついにたまりかねて賃金と労働条件改善のためにストライキに訴えた。

階級闘争を激化するためにストライキをおこす革命家たちに対して、すでに特権を得た者たちがその特権をさらに増すためにストライキをうつという例もある。既に年収約一万六千ポンド（約七百二十万円）のスカンジナビア航空のパイロットが昇給を求めてストライキをした例がある。このような行動がやがては何でもとれるものはとってやろうという心理を助長し、その結果恵まれない人に対してはさらに無関心になるということを、パイロットたちもまた彼らを支持した革命家たちも見過ごしている。西欧における労働条件改善のための連帯にもとづいた闘争は、低賃金グループの条件改善、経営参加の拡大、労働環境改善をめざしているといえるかもしれない。条件改善への闘いが発展し、造船や港湾産業におけるように産業ごとに国際化している例も少なからずみるときに、第三世界の最も貧しい所得者や失業者の利益を叶えられるようなふさわしい方法がないものかと思う。

大多数の人たち――右、左、中立――がそれぞれとれるものなら少しでも多くとろうとしている時に、パイロットだけに焦点をあわせるのは不公平かもしれない。それ程目立たないかもしれないが右側の人たちによる階級闘争も左同様きびしいものである。特別の権益や、権力、或いは彼らを支えている秩序が危機にさらされるようものなら、ほとんどの人は反射的に支配を強める。そして恐れがアドレナリンを血液に送りこみ挑戦者を征圧するための行動がとられる。

階級闘争を、その原因を正さずに人為的にとり除くことはできない。対立する利害関係がより高い次元で建設的に処理できるためには人の考え方に革命的な変化がおきるときであろう。この革命とは目先の利益や狭い階級的利益をこえて大きな目的を受け入れ労働と生産を道義的目的のため用いること、言いかえるとそれは人間の求める物心両面の必要を満たすことなのである。

（続く）